

内陸に広がる「最悪のシロアリ」 食害を放置して取り壊した例も



(イラスト：勝田登司夫)

事件の概要

アメリカカンザイシロアリという外来種のシロアリによる被害が、深刻なものになりつつある。このシロアリはアメリカ西部が原産地で、日本で最初に見つかったのは1970年代。外来種であることから、被害域は港の周辺などに限られるものと長らく思われてきた。だが近年になって、内陸部での被害報告が相次いでいる。地面に巣をつくらず、木から木へ直接飛び渡るので、完全な駆除は現時点では難しいという。木造住宅にとって「最悪」ともいえるこのシロアリについて、被害の現状や対策取材した。

左ページ上に掲載した被害写真は、東京都区内に建っていた築30年の木造住宅の小屋裏だ。シロアリ防除業者から「食害が進みすぎて手の施しようがない」と見放され、今年6月に取り壊された。これが「アメリカカンザイシロアリ」による被害だった。食害は住宅全体に及んでいた。

このシロアリは食い進んだ木の穴の中で絶えずフンをしている。木材表面に開けた穴から、そのフンがこぼれ落ちる。この住宅では大量のフンが天井板の屋根裏側にたい積し、防除業者が天井板をはずして点検しようとしたところ、まとまって落ちてきた。

近隣の他の住宅から渡ってきて、この住宅内の木部に定着したと見られている。付近一帯がこのシロアリに「汚染」されていたのだ。

木から木へ飛び渡る

シロアリの和名は「乾材」つまり乾燥材を好むところから付けられている。木の中だけで育ち、表面に穴を開けて巣立ち、他の木へ直接飛び渡る。ヤマトシロアリなどは違い、土壌や土台を薬剤処理していても防げない。木部があ

ればすき間から入り込んで、かじって穴を開けて潜ってしまう。食害の進むスピードは遅いが、新築時の対策にも限界がある。

日本で初めて見つかったのは32年前。場所は東京の江戸川区だった。被害はあまり拡大しなかったため、問題にはならなかった。

だが状況は変わった。日本しろあり対策協会（白対協）が2007年にまとめた「乾材シロアリとその防除対策に関する報告書」は、次のように注意を促している。

「（被害分布は）宮城県から沖縄県までの20都府県に及び、地域によつてはかなりまとまった被害が発生していることから、今後の急激な拡大が懸念されている」

今回取り上げた住宅の点検を手がけ、このシロアリの駆除を何度も経験したという関東白蟻防除社長 長 南山和也さんはこう話す。

「通常は、木材表面に開いた穴やフンで食害を確認できた木材に、薬剤を注入して駆除している。アメリカではくん蒸処理が一般的だが、薬剤の毒性が強く、処理を誤ると危険で、密集した住宅地では使いにくい。国内ではくん蒸処理は文化財に使われる程度だろう」

木材の表面にシロアリの開けた穴がなければ、薬液の注入自体が難しい。食害痕が隠れて見えない場合もあり、薬剤注入で駆除しても「再発」する確率は極めて高いという。白対協の報告書は、「処理後は1年1回程度の定期点検をすべき」としている。南山さんも同意見だ。「食害の広がる速度は緩やかなので、見つけるたびに駆除すれば大きな問題にはならないだろう」と見る。

くん蒸処理ができるなら、ほぼ確実にシロアリの駆除できる。だが、くん蒸に使う薬剤は空気にさらされると分解してしまう。処理しても近隣からシロアリが渡ってくることは防げない。

不動産売買では問題に

輸入家具や輸入建材にまぎれて持ち込まれ、住宅に定着してコロニーをつくった後、周辺の住宅へ徐々に広がっていく。これが、このシロアリによる被害のパターンだ。いったん広がれば、一帯ですべて駆除しない限り、根絶できない。住宅会社にとって一番よい対策は、そんな地域で木造住宅を手がけないことだろう。

不動産売買絡みではトラブルにもなりかねない。今回取り上げた住宅のあった地域では、議会で食害が問題とされ、区は回覧板でその地域に周知した。都内の不動産行政を管轄している都不動産業課は次のように話す。

「その一帯がアメリカカンザイシロアリの生息地であるという情報は『隠れた瑕疵』に当たるだろう。売買後に問題が出たら原則的には売り主が瑕疵担保責任を負うべき。だがそれは、売り主がその情報を知っていたにもかかわらず、説明なしに売った場合に限られる。仲介業者も同じだ」

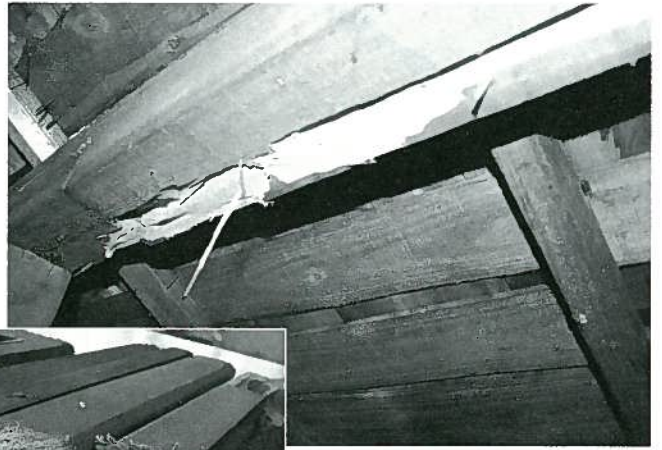
つまり今回、回覧板の回った地域なら売り主の責任を問える可能性もあるが、周知が徹底していない場合は、買い主は損害賠償を求め先さえないことになる。

注文住宅であっても、食害が起これば住宅会社へのクレームにつながるのには間違いない。まずはこうしたシロアリが存在することを知り、気になったら白対協に加入している駆除業者に現場付近で駆除例があったかを聞くなど、情報収集に努めることから始めたい。

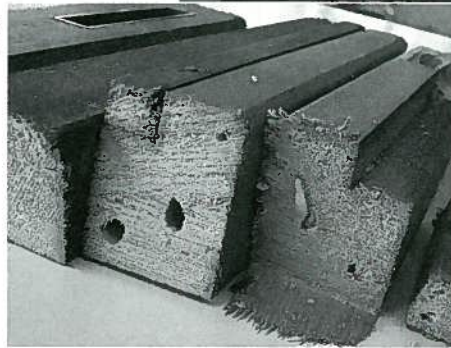
（池谷和浩フリーライター）

至るところに食害を発見

右の写真は食害が原因で取り壊された築30年の住宅の小屋裏。小屋裏には、屋根の野地板、垂木、垂木を支える棟木、棟木を支える束など、至るところに食害痕があった。食害を受けた木を叩くと、内部に穴があるので軽い音がしたという。この住宅の建っていた場所は、アメリカカンザイシロアリの食害が集中する地域の一角だった。近隣の住宅でも食害が確認されている



食害を受けた屋根の棟木。木材表面近くが食べられ、表面には薄い木の層しか残っていなかった



取り壊された住宅で使われていた木製建具を切断した様子。内部を食われ、穴が開いていた



アメリカカンザイシロアリのフン。天井裏にはこうした粒状のフンが大量にたい積していた (写真：本誌)

区からのお知らせ

アメリカカンザイシロアリにご注意!

ここ数年、区内で、もともと日本にはいなかったアメリカカンザイシロアリの被害が生じています。正しい知識がないと、対応を誤りますので、その生態や特徴についてお知らせします。

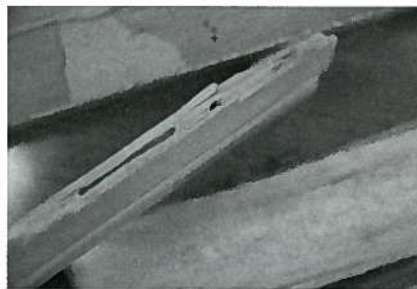
悪質な駆除業者にご注意を!

駆除や防除工事については、
社団法人日本しろアリ対策協会関東支部
へお申し込みください。

区役所
区保健所

取り壊された住宅の建っていた地域では、区が回覧板で被害を告知した。議会の一般質問で取り上げられたのがきっかけという

アメリカカンザイシロアリはこんな虫



関東白蟻防除が保存するサンプル。アメリカカンザイシロアリの食害を受けた輸入木製サッシの枠部分だ。表面の塗装面には穴は開いていないが、内部が食われていた。輸入される前からシロアリが内部に潜っていた可能性もある (写真：本誌)

原産地はアメリカ西部からメキシコで、体長は最大で9mm程度。乾燥した木に含まれるわずかな水分で生息でき、生木や湿った木は食べない。乾燥した砂漠地帯でも被害がある。土の中に巣をつくるヤマトシロアリやイエシロアリとは違い、木の中に巣をつくって卵を産む。確認されている範囲では、卵から成虫になって死ぬまでは188日から415日だという

(白対協の資料に基づく)



右/アメリカカンザイシロアリの羽アリにも変態するタイプ
下/アメリカカンザイシロアリの羽アリにはならないタイプ



要するに

- 地面や土台などを薬剤処理しても防げない、アメリカカンザイシロアリという外来種が存在する
- 完全な駆除は難しい。生息地は沿岸から内陸部へ徐々に広がっている
- フンや食害痕らしき穴を見つけたら、防除業者に相談すべき